

海外での留学生リクルーティング活動

—桜美林大学の取り組み—

桜美林大学入試広報センター・入試担当次長 和田 満

WADA Mitsuru

キーワード： リクルーティング、海外事務所、中国現地入試

1. はじめに

桜美林大学は、多種多様化する国際社会において、本学学生が卒業後も国際社会に貢献（Global Outreach）できるような人材育成・取り組みが必要であるという視点に立ち、学生の国際化・グローバル化への推進について教育面、環境面への整備を行っているところである。具体的には2020年を目処に外国人留学生（以下：留学生）の受け入れを全学生数の25%までに引き上げ、本学に集う学生の4人に一人を留学生にすることで、日本人学生が、キャンパスにいながらにして異文化交流ができ、国際性が身につく環境を作り上げることを目標としている。それは、桜美林学園創立者である清水安三が教育目標として掲げた「本学園はキリスト教主義の教育によって、国際的人物を養成するをもって目的とする」を具現化する取り組みといえる。

また2021年に本学園は（清水安三が1921年に北京で創立した「崇貞学園」から数えて）100周年を迎えることになっている。100周年にむけ、学園創立者の思いを実現すべく積極的な留学生の受け入れを行い、留学生と日本人学生相互が刺激しあえるような交流を図り、全学生が国際社会に貢献できるよう学生支援を行っているところである。

2. 桜美林大学北京事務所

2020年までに留学生（正規・非正規学生を含み）を全学生の25%までに引き上げる目標については、国際交流センター、国際学生支援課、入試広報センターが中心となり取り組んでいる。本事例報告では、私が2009年5月から2013年6月までの4年間（2011年からは日本からの出張業務）担当した「桜美林大学北京事務所（以下：北京事務所）」での活動を中心に、上記3部署と連携し取り組んだ中国における留学生リクルーティングについて報告させていただく。

はじめに北京事務所の概要についてであるが、北京事務所は2005年に北京市朝陽区藍堡に開設し、現在は同区にある陳経綸中学の校舎内に事務所を置いている。桜美林学園の前身は1921年に北京の朝陽門外に本学園創立者清水安三によって建てられた崇貞学園であり、崇貞学園は終戦とともに当時の中国共産党に接收され、その後共産党管理のもと北京第四女子中学～朝陽中学を経て、現在は当学校に多額の寄付をした香港の事業家である陳経綸氏の名を借り、校名が陳経綸中学と改められている。

桜美林大学が北京に事務所を構えるようになったのは、崇貞学園時代から中国に縁

があったこと、陳経綸中学（桜美林中学・高校との姉妹校）との連絡体制を円滑にすることなどであった。2008年頃より、北京事務所の役割についての学内的関心も高まり、北京事務所の主たる業務を以下1)～5)のように作成し、2009年からはその項目を履行すべく大学から担当者を正式におくようになった（開設当初は中国在住日本人を本学嘱託職員として業務委託していた）。

北京事務所での主な活動は以下のとおりであった。

- 1) 留学相談会等への出席（JSPS主催の重点大学での「留学共同説明会」など）
- 2) 同窓会の実施
- 3) 中国国内で行われる現地入試のサポート
- 4) 中国での大学提携・協力におけるサポート
- 5) その他

1)～5)項目のうち、1)2)を重点的な取り組みとしたが、やはり入試関連業務・学生募集に関わる比重が高く、北京事務所の活動の7～8割は留学生リクルーティングとなった。

北京事務所に着任した2009年より、日本学術振興会北京代表処（JSPS）や中国に大学・教育機関事務所を設ける情報連絡会である「希平会」が主催する「日本留学共同説明会」に参加した。同説明会は中国の重点大学を中心に行われ、本学を売り込む絶好の機会であり、かつ参加料が無料でもあったので、名前だけでも覚えてもらっていただければということから参加した。このあたりは新人もしくは大阪の芸人が東京のTVなどに出ると必ず言う「名前だけでも覚えて帰ってください。」という状況であった。ただし、やはりそこには大きな壁があった。というのも、中国では国立こそが大学。国立大学でありそこに在籍することこそ価値があるという高等教育文化であり、日本の私立大学で著名でもない本学などはほとんど相手にされない状況であった。

「日本の大学で知っている大学はどこ？」と聞くと、まずは東京大学、そして次点には必ずといっていいほど早稲田大学、以下京都大学、北海道大学、名古屋大学、東北大学であった。早稲田大学においては国立私立の別を知っているかは別として、かつてより中国人留学生の受け入れも多かったことから中国における知名度の位置は東京大学の次にあるといえる。

説明会に参加したものの、配布する資料は日本から取り寄せた日本語表記によるパンフレットのみであり、日本語学習者でなければ手にされることもなかった。相談ブースの装飾等においてもバナースタンドなどなく、他大学事務所とは比べようもない状況であった。そこで初年度より留学生リクルーティングに必要な『桜美林大学ガイドブック(中国語・日本語併記版)』などを制作することに重点をおき、翌年にはガイドブックなどのツールを活用してリクルーティングにあたった。

3. 海外高校生による日本語スピーチコンテスト

北京事務所着任の翌年2010年、NPO法人エデュケーション・ガーディアンシップグループの羽賀氏から当事務所への訪問を受け、「海外高校生による日本語スピーチコン

テスト」を北京で開催するので協賛いただきたいとの依頼を受けた。

既に「海外高校生による日本語スピーチコンテスト」は実施されており、日本での国際大会も14回を数えていた。日本で活躍中の演歌歌手 JERO なども第3回大会でアメリカ代表として来日し3位になっていた。その国際大会につながる予選を中国で実施したく、開催にあたっての協賛をしていただけないかという内容であった。

企画からして、幾度か拝見した大学生の日本語スピーチコンテストではない目新しさ、羽賀氏が所属するもう一つの組織である JOBA（帰国子女を対象にした教育支援機関）を私が以前より知っていたこと、北京事務所としても活動実績・成果を何かカタチにしたいという気持ちがあり、即座に協賛を受け入れた。羽賀氏は北京に所在する大学事務所を相当数訪問したそうだが、協賛を受け入れたのは桜美林大学のみであったようである。

その年に開催された北京での大会には、桜美林大学北京事務所は協賛ということもあって審査員として参加した。大会出場者は20名ほどであるが、すでに中国国内予選を通過した強者ばかりであった。高校生とはいえ、その多くが中学時代より日本語を学習している生徒であり、日本語能力は本学の中国現地試験で大学院生の面接を担当した経験からみてもその水準以上のものであった。この大会を観れば、大学関係者の誰もが「このレベルの層を本学学士課程に迎え入れるためには？」という思いに駆られるはずである。私自身も大会直後にどうしたらこれらの生徒を獲得できるのか？このような生徒を育成する高校とのパイプ作りができるのかを考えていた。

初年度ということもあって、閉会後のレセプションで名刺交換などをしたが中国の高校教諭はほとんど名刺を持ち合わせておらず、留学生リクルーティングを行うには主催者でもある中日青年交流中心から高校情報を入手しなければならなかった。また情報入手にはいくつかの壁もあり、時間のかかるものであった。さらに大学側の課題として、優秀な日本語学習者のいる高校へアプローチを行うには、まずは中国現地の用学士課程入学者選抜について日本側（大学）に考えてもらう必要もあった。

幸いにして、私が桜美林大学に籍をおいてからそのほとんどが入試業務であったことから、北京事務所より新たな留学生募集・選抜方式についての企画立案をさせていただいた。最初に試みたのは、日本で開催される「高校による日本語スピーチコンテスト国際大会」に出場する高校生を対象にした留学生選抜の導入であった。国際大会ということもあり、中国の出場者並みの水準であれば問題ないと思い、奨学金制度を含む選抜方式を導入することができた。

4. 大学特別選抜「特別奨学生入学者選抜（留学生）」の実施

2011年の4月入学者を対象に「大学特別選抜特別奨学生入学者選抜（留学生）」が入試広報センター（旧部署名：アドミッションセンター）の協力のもと実施された。当時はまだ選抜の広報ツールもまともなものではなく、日本語と英語で作った募集要項のみであった。それをNPO法人エデュケーション・ガーディアンシップグループに依頼し、各地域の予選会で配布をしてもらったのである。本学からの積極的アプローチが少ないと思っていたところ、なんと世界大会に出場したニュージーランド代表の1名が本学へ応募してくれてくれたのである。何より実績の欲しかった私としてはその報

告を聞いて胸をなでおろすことができた。また、その需要が少なからずあることも認識し、次年度以降の広報活動の取り組みにも北京事務所から大学側に進言させていただいた。しかし、翌年の2012年入学希望者は0名であった。唯一希望のあった韓国人生徒も、親が竹島問題と絡めて反対したことによる。

本年2013年は7月に希望者10名と面談したが、高校1～2年生もいることなどもあって、結果としてはカンボジアからの1名の入学者を来春迎えることとなった。

本選抜についてもう少し触れておくと、本選抜は上述した「高校による日本語スピーチコンテスト国際大会」がベースになっている。国際大会は毎年7月に行われ、10日間ほど代表者は日本に滞在することになっている。この期間を利用し多くの日本文化などを学ぶのであるが、プログラムの一つに日本の学校訪問というのがあり、そこに桜美林高校との交流、桜美林大学への訪問が企画されている。この取り組みは上述した羽賀氏からの依頼であったが、本学としても桜美林高校生により多くの異文化交流機会を持ってもらいたいことから協力している。ちょうどこのタイミングで、本学を訪れた代表者一行のうち桜美林大学に興味のある者を対象に簡単な大学説明、その中でも進学希望の強い生徒については面接を行い、本学への入学意思などについて確認している。当然その段階（志願以前）では出願書類も志願者の基礎情報もないのだが、その点は割り切って出願前に面接を実施することで留学生受験者が利便性を図れるようにしている。当人には当日に出願書類を渡し、面接での印象や当日の桜美林高校訪問と併せて行う大学キャンパスツアーなどにより最終的な判断をして出願してもらうことにしている。

5. 中国現地入試について

私の北京事務所着任前より、桜美林大学は大学院が中心となり中国現地試験を実施している。1987年より開始され、本学と学術交流を提携した中国の大学の4年生を桜美林大学の大学院に入学者選抜実施の上、招き入れるというものであった。その後「3+1+2（中国の大学3年+本学別科1年+本学大学院2年）」の取り組みやダブルディグリー、などの取り組みが拡大してきている。しかしながら、1987年当時と現在とでは中国の高等教育環境、特に大学の国際交流に関する取り組みが大きく様変わりしてきており、特に日本語教育を重視している中国の大学への日本側（大学）アプローチは凄まじいと聞く。

日本語教育に力を入れている中国屈指の大学である大連外国語大学などにおいては、46の日本の大学と提携を結んでいるという（2013.10.9訪問時情報）。中国に進出する日本の各大学も、本学と同様既に日本語能力に問題のない中国人留学生を獲得すべく動き出しているとのことであった。それだけに本学が訪問し説明会を実施した際に23名の来場者があったことに、「思いのほかに来ましたね」とのコメントをもらった。その真意はわからないが、「国立でも著名私大でもない割には。。。」という意味合いなのであろう。中国国内での留学生争奪戦は厳しさを増している。

ここ数年、本学大学院への留学生リクルーティングは上記のことから厳しい状況である。志願者数は右肩を下げるばかりである。理由の一つとして、2005年度入試まであった外国人留学生への35%の授業料減免制度を大学・大学院とも全面的に取りやめ

たことが大きい。それにより、国内での留学生募集においても2006年度入試で75%の減少になり、それ以降国内留学生志願者は減少の一途を辿っている。

一方、日本学生支援機構が主催する留学フェアや中国で重点大学を中心に行われる留学共同説明会などをみる限り、他の私立大学も国立大学も授業料減免措置や独自の奨学金を謳い留学生獲得に励んでいる。本学の場合は授業料減免制度がなく、奨学金も入学後の成績による競争的奨学金なので約束されたものでないことから、異国の地（主に日本より経済的に低いとされる国）においてはPR・魅力にはならない。まさに武器を持たずして戦場に立たされ闘っている状況と言える。

6. 「中国高校指定校推薦選抜」の実施と課題

上記中国現地入試の事例報告に見られるように、大学院における中国からの留学生リクルーティングが厳しい環境になってきたこと、また本学大学院の収容定員における留学生獲得の限界などを考えると、留学生25%を達成するにはどうしても学士課程への留学生リクルーティングを進めなくてはならない。ただしどのように展開すればいいのか、皆目検討もつかなかった。まずは、上述した「海外高校生による日本語スピーチコンテスト」の中国大会での出場者リストを入手することと、大会等で少しでも桜美林大学の名前を覚えてもらうこと。名刺交換等で強引に引率者の高校教諭と知り合いになってその高校での説明会を実施することを考えた。そして、何より売り物・土産としての新たな留学生選抜方式を作らなければならなかった。

先に述べたようにコンテストに参加する高校の日本語教育への取り組みは素晴らしく、その評価も中国国内の大学から認められている。高校のほとんどが中国国内の外国語系大学や北京大学など一流大学にある日本語学部への推薦枠をもっており、3学年の6月に行われる大学進学のための統一試験（高考／日本の大学入試センター試験に相当）を受験することなく、1月頃には進学が決まっているという。それだけの進学校に対して日本国内でも偏差値的にボリュームゾーンに位置する本学へどう呼び込めばいいのか？

考えた結果導き出した答えが「中国高校指定校選抜」であった。日本の高校に対する指定校とは異なり、やはり日本と中国に経済格差がまだあることから奨学生としての取り扱いを盛り込むこととした。原資に限りがあるので1高校につき奨学生枠は1名。日本語能力の水準と高校時の成績も出願資格の条件として設定した。同じく奨学生枠ではない自費による募集もかけた。

2012年、年度の初めに企画を日本側に申し入れ、入試広報センターの協力もあって全学群での受け入れが承認され、同選抜を土産に大学の売り込みのため指定校として決めた13高校のうち9校で大学説明会を実施した（他4校は尖閣諸島問題もあり丁重に断られた）。

2013年3月、9校のうち4校からの出願を得た。すべてが奨学生枠のみでの出願であったが、面接時の日本語能力水準は高く、大学院受け入れ条件の日本語能力試験N1級を2ヶ月ほどで取得するほどの実力者もいた。生徒たちは2013年9月に学士課程に無事入学し、すでに日本人学生とともに本学で学んでいる。

今後の展開を考え、2013年7月には9校に対して本学を知ってもらう機会提供と正

式な提携調印を結ぶために桜美林大学へ招待をした。経費がかかることから毎年実施というわけにはいかないにしても、中国国内での学生募集に関わる営業活動（広報活動など）などは法的に取り締まりが厳しいということもあり、日本に招待することをもって広報的位置づけで展開していければと考えるところである。

2013年10月、実績のあった4校を中心に新しい募集要項を持参し、大学説明会をすべく訪中した。昨年度と大きく異なるのは実施時期の前倒しである。上述したように各高校は進学率が高いため、競合する中国国内の大学、また日本の大学と多く提携している。ある中国の大学では、日本のある大学の説明会動向をチェックし、その日程を見ながら説明会の日時を調整しているという。それだけに本学としても少しでも早期にリクルーティングを実施する必要があった。

著名な進学高校は中国内外からのリクルーティングにあっており、まさに売り手市場といえよう。今回のリクルーティング活動において桜美林大学は、奨学生枠のほか自費留学生での出願も得ることができた。しかしながら、出願者のうち2名が出願を取りやめた。理由は本学以上のブランドをもつ日本の大学、また授業料減免を武器に留学生獲得を行う日本の別の大学への鞍替えであった。今後ますます加速する可能性のある中国の高校への留学生リクルーティングは、売り手市場だけにブランドのある大学、減免措置・奨学金等を持たずしては成功に導けないと思われる。本学の課題がそこにある。

最後に、今後中国での留学生リクルーティングを行う予定のある教育機関のために、参考までに中国教育機関で日本語教育を実施しているデータが国際交流基金により情報提供されているので紹介し事例報告を終わりとする。

国際交流基金（北京）<http://www.jpfbj.cn/Education07.asp>